
エデン～創造と破壊～

近山 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデン〜創造と破壊〜

【Nコード】

N1143BA

【作者名】

近山 流

【あらすじ】

世界線の移動によってパラレルワールドに飛ばされてしまった少年。
彼はその世界にどのように関わっていくのか……

ジャンルは主人公最強ハーレムと、王道ですが、私が1番好きなジャンルだったのでチャレンジしてみました。

勢いで書きはじめてしまった小説で駄文ですが、がんばっていくので、是非アドバイスお願いします。

設定など（前書き）

まずは、設定です。

設定など

主人公

リヨウ・エンドウ（15）

大規模な世界線の移動によりパラレルワールドに飛ばされてしまった少年。

能力

創造と破壊

具体的な内容は本文で

世界設定

科学ではなく魔術が発達した世界で、今だほとんどの国が民主制ではなく王制となっている。

魔法について

火・水・風・雷・土の基本属性に光・闇の上級属性、そして、氷・炎などの派生属性などがある。

属性の中にも下位魔法、中位魔法、上位魔法、特位魔法がある。

光・闇の上級属性は基本属性と違いランクが一つずつ上になっていて、上級属性の下位魔法は基本属性の中位魔法にあたる。

設定など（後書き）

不定期更新ですが、頑張っていきたいと思います。
基本属性に風を追加しました。

パラレルワールドへ（前書き）

まず第1話です。

パラレルワールドへ

その日、この世界から遠藤亮という存在が消えた……

「ここはどこだ？」

リヨウは周囲を見渡す。

そこはみられない森だった。

彼はさつきまで家への帰路を歩いていたはずだ。

しかし全く検討がつかない状況に立たされたにもかかわらず、彼の精神はいたって普通だった。

これは、彼の適応能力が凄いということではない。彼はまだ完全にはこの状況を理解できていないのだ。

「とりあえず情報収集だな、移動しよう」

その時だった。彼は生まれてはじめて、命を脅かすほどの脅威を感じた。

パラレルワールドへ（後書き）

初めて小説を書いてみましたがいかがだったでしょうか？

是非感想お願いします。

脅威

脅威の正体は体長2メートルをゆうに超える巨体を持ち、その巨体に見合うほどの大きさの強靱な爪を持つ熊だった。

リヨウは生まれてはじめて心の底から恐怖した。

彼は今まで日本という平和な世界で命の危険などとは無縁な生活を送っていたのだ。

少なからず自分を守るすべを知っているとはいえ、目の前の脅威を排除できるほどのものではないし、その前に恐怖で動くことができなかった。

熊の腕が振り落とされる。

恐怖で固まる体を無理やり動かし攻撃をかるうじてよける。

ぎりぎりかすってしまった爪により服が軽く破れ、さらにその反動によって大きく吹き飛ばされてしまう。

泥だらけになり息も絶え絶えの体でリヨウは思う。

「せめて何か武器があれば…」

その時彼の頭によぎったのは、彼がよく遊んでいるアクションゲー

ムで愛用している太刀だった。

そしてそのイメージは彼の中でしだいにより強固な物へと変わっていく……

熊がその腕を大きく振りかぶったその瞬間、

彼の能力は開花した。

脅威（後書き）

2話読んでみた感想は……短い？

こんな短かったっけ……

これからはどんどん長くしていくつもりです。

感想お願いします。

熊との戦闘の描写を少し編集しました。

開花（前書き）

今回はかなり頑張った。

開花

彼の目の前には、熊に攻撃される直前まで頭に思い浮かべていた太刀が出現していた。

彼は一瞬驚いたものの、目の前の敵を倒すという本能が、理性を吹き飛ばした。

振りかぶられた熊の腕を太刀で切り上げる。

熊の腕からは決して少なくない量の血が流れているが、気にしている様子はない。

しかし、突然の獲物の反撃により、熊の動きが一瞬とまった。

リョウは立ち上がり、己の限界を超える速さで切りつける。

その太刀筋は決して良いものではなかった。

小学生が行うチャンバラのように、型なんてものは全くない。

ただ、チャンバラと決定的に違うことがある…それは、純粋な殺意、己の命を脅かすものを排除しようとする明確な殺意だ。

しかし、致命傷を与えることはできず、熊は体制を立て直してしま
った。

所詮は非力な人間だ。熊に腕力で叶うはずもない。
たった一撃で太刀は吹き飛ばされ、リョウも弾き飛ばされた。

「ぐはあ」

5メートルほど吹っ飛ばされ、口から空気と一緒に血が吐き出され
た。

ここで死ぬのか？

こんな訳の分からない場所で、誰にも知られずに？

そんなの嫌だ。

まだ俺は死にたくない。

やりたい事がいっぱいあるんだ。

彼の思考はそこまでいったところで急激に冷やされていった。

彼の中に眠っていたあふれださんばかりの膨大な力がついに発動し
た。

その力は彼の中から溢れだし、周囲にも影響を与えている。

彼を中心に風が吹き出されている。

熊は野生の本能で危険を察知した。

だが、もう遅い……………

彼は目の前の脅威に向けて短く言い放つ。

「死ね」

その瞬間脅威は跡形もなく砕けちり消滅した。

そして彼は意識を失った。

開花（後書き）

感想よろしくお願いします。

脅威は去って（前書き）

5話です

脅威は去って

「……………う……………いき……………て……………る？」

そうだ、熊は！

慌てて周囲を見渡す。

しかし、周りには太陽の光を隠すほどに生い茂った木々以外なものもない。

そして彼は思い出した。

熊を殺したことを、自分の中に溢れ出した不思議な力のことを……

一体なんだったんだあれは？

最初に起きた、自分が想像していたものが実際に現れたこと

そして、彼が強く念じた瞬間熊が跡形もなく消滅したこと

まず最初に考えることは、最初に起こったことだ。

試しに強く念じてみる。

「火を」

瞬間ボツという音と共に、掌から火が出現した。

なるほど、念じること、無から有を作り出す。

まるで神の力だな。

そう皮肉げに笑ってみる。

己の想像の範囲で、戦術が無限に広がる。

確かに凄い力だ。

だが、たった火を出すだけで体力をほとんど使ってしまうようだ。
改善の必要があるな。

これから楽しみだ。

彼はニヤリと笑う。そこには恐怖に震える男の姿はもうなかった。

脅威は去って（後書き）

旅立つのはもうちょっと先だと思っています。

今回は読みやすいように一文一文間をあけてみたんですがどうでしたか？

感想お願いします。

次回はリヨウの能力が少し分かります。

能力（前書き）

連続投稿
♪

能力

あれから1年がたった。

「今日はこんなものか」

そこにはあの日出会い、リョウの心に初めて本当の恐怖を与えた巨爪熊の死体が三つ転がっていた。

自分の能力を把握し、実験し、マスターするまでにかなりの時間が経っていた。

リョウは想像したものを出現させる自らの力を

「創造」の能力と名づけた。

安直だが、一番この能力のことを表していると思ったからだ。

さらに、実験をしていく中で創造の能力にはいくつかの制約があることに気づいた。

まず、この世の理に反することや、動物、虫、植物などの生物は創造することはできないということ。

それは逆に、生物でなければなんでも創造することができるということだ。

しかし、それにも制約は存在する。

- ・創造したいものを明確にイメージすること

これは簡単なようで意外と難しい。

細部まで細かくイメージしなければいけない。

そうしないと、不完全な形で出現したり、武器であれば強度が全くなく、触っただけで壊れるなどの状況に陥ってしまう。

これをクリアするために半年もかかったのだ。

そして、

- ・イメージする長さ、質量によって疲労度がどんどん上がっていくこと

創造の能力を練習するにあたり、最初は何度もぶっ倒れた。

多くの敵（後にそれは魔物という存在だと知る）に囲まれた中で、危うくぶっ倒れそうになったり、何度死を覚悟したか数えきれない。

そして、幾度となく死の危険に苛まれながらも、イメージの効率化をはかり、今では簡単な物だと一秒以内に、難しい構造のものでもかかって十秒という驚異的な速さで作り出すことができ、かつ、いまだ時間短縮が行うことができている。

さらに、何度も練習したことにより、力（主に精神力）を効率良く使うことにも慣れてきている。

長かったなここまで

そうして苦笑したところでリヨウは何者かの殺気を察知した。

森のなかでの安心できない生活、そして度重なる殺気に身を晒していたリヨウの感覚は限界まで研ぎ澄まされている。

やろうと思えば、半径1キロ圏内の生物反応、殺気を感知することも可能だ。

リヨウが感知したのはかなり大きい生物反応

すぐさま、彼は念じる

（サーチ）

その瞬間彼の前にはレーダーのようなものが出現した。

すぐさま、その反応に向けて、レーダーをとばす。

この機械はレーダーにぶつかった物を画面に写しだす事ができるというものだ。

しかし、いつまでたっても、画面には何も映らない。

故障なんてことはありえない。

どういうことだ？

リヨウは首を傾げる。

その瞬間、リヨウは右上方からの殺気を直感で察知し、何も考えず左側に大きく跳ぶ。

ズダーン！！

何か巨大な物が空から降ってきた。

思考が追いつく、何だ一体！？

砂埃がはれ、そこに姿を表したのは、全長2、3メートルもあるかと思われるほど、巨体を持った狼だった。

「我は天狼なり、汝は強者たるものか？」

能力（後書き）

……書き溜め全部出しちゃった

考えなしとか言わないの！

ついにハーレム構成員の一人が登場！！

ドンドンパフパフ

………古いかな？

てなわけで、次回予告、

リョウの前に現れた伝説の生物「天狼」

リョウVS天狼

勝つのはどっちだ。

次回は戦闘回、頑張ります。

では、感想お待ちしております。

V S 天狼 1 (前書き)

予想以上に長くなってしまったため二つに分けて投稿します。

V S 天狼 1

「我は天狼なり。汝は強者たるものか？」

リヨウの目の前に突如現れたものは最初にそう言った。

「お前はなにもんだ？」

リヨウは問う。

「天狼と言ったはずだが」

その天狼と名乗る巨大な生物は小バカにしたように言う。

「違う、そういうことじゃない。サーチのレーダーを飛ばしたはずだが、何も反応しなかった。何をしたんだ？」

「レー……ダー？なんだそれは？我はただ走ってここまで来ただけだが」

走って？確かに察知した殺気はまだかなり遠いものだった。だからこそレーダーを飛ばして情報を知ろうと思ったわけだが………

……まさかリーダーが到達するより速くここまで来たっていうのか！？

うそだろ、信じられない。

だがもしそうだとしたらかなりの、いや、想像を絶するほどのスピードだ。

それにこの森に迷い込んで以来、いろんな獣と戦ってきたが、意志疎通ができるやつに会ったことは初めてだ。このことからかなりの知能の高さが伺える。

これはかなり面倒な敵に会っちゃったな。

リヨウは心の中で舌打ちした。

「汝から不思議な力を感じる。もう一度問う。汝は強者たるものか？」

天狼が言った。

「だったらなんだ？」

「我と勝負……いや、そんな生温いことは言わない、さあ殺しあおうではないか」

「何言ってやがんだお前は」

なんだこの威圧感は、他のやつらとは段違いだ。

こいつは危険だ。

リヨウの直感は大音量で警報を鳴らしている。

……逃げれるか、こいつと戦うのは絶対にまずい

「いくぞ！」

間髪入れずに狼がとびかかってくる。

いきなりかよ。間に合うか……

リヨウは内心で毒づきつつ

アクセル

「《加速》——！」

リヨウが持つもう一つの能力を身につけるにあたりマスターした力
体全身に溢れている生命エネルギーを活性化させることにより、身体
を強化することができる。

加速は足の生命エネルギーを一気に活性させることで超速で移動するものだ。

「ほう。私の攻撃をよけるか」

狼はどこか嬉しそうに言う。

（よけなきゃ今頃死んでんだろ）

リョウは心の中でそう毒づく。

「逃げるつもりか？」

「当たり前だろ。お前と戦って確実に勝てるとは思わない。俺は極力無駄はしない主義でね」

「私の速さを前に逃げれると思っているのか？」

そう言った瞬間、狼の巨体はリョウの後ろにあった。

（うそだろ！？何て速さだ）

今日何度目か分からない驚きを口にする。

アイアン

「《鉄壁》……！！

慌てて体全体の生命エネルギーを異常活性させ、肉体を鋼のような固さにする。

ガンッ！！

鉄を叩いた様な音がして、リョウの体が弾き飛ばされる。

「……………く……………流石にいてえー」

「……………私の全力の一撃をくらってまだ生きているのか……………身体強化魔法か？……………いや、身体強化程度で我が一撃を防げるはずがない」

ここで初めて狼は驚いた。

「汝は人間か？」

「失礼なやつだな。俺は人間を止めたつもりはない」

（くそ、主義に反するがやるしかないか……………死ぬのはゴメンだ）

そして唱える……………

「創造、形状は銃、連射機能付き、弾丸は炎」

まだ、複雑な構造のものは声に出さなければ明確にイメージできない

いのだ。

そしてリヨウの手に銃が出現する。

「なんだ？召喚魔法か？」

「いいや」

リヨウはニヤリと笑い引き金を引く、

ババババババツ

一秒に10発もの速度で炎を纏った弾丸が狼に襲い掛かる。

「ツツツ！！」

狼は己のスピードを駆使して次々と弾丸を避けていく。

しかし、数が多い。

しだいに、避けられない弾が出てきて、みるみるうちに被弾数があがっていく。

「ハハハハハ…いいぞ、いいぞ人間。我が傷を負ったのは何十年ぶりだろうか」

狼は心底嬉しそうに笑う。

「我も全力で行かせてもらおう」

狼の口から何十個もの炎弾が発射される。

リヨウは銃でそれらを迎撃していく。

「火をはく狼なんて聞いたことないぞ！」

「我はただの狼なんぞではない。天狼だ。こんなものまだ序の口よ」

狼は薄く笑みを浮かべる。

V S 天狼 1（後書き）

V S 天狼 2 は今日中に投稿するつもりです。

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143ba/>

エデン～創造と破壊～

2012年1月4日14時50分発行